

第7回南日本経済賞

第7回南日本経済賞（南日本新聞社主催）は、農業生産法人のざき（薩摩川内市、野崎喜久雄社長）とプリントネット（始良市、小田原洋一社長）に決まった。品質の高い黒毛和牛を肥育し、県北部豪

あす贈賞式

雨で被災しながらも国内外で高い評価を受け続ける功績と、通信販売型印刷で収益を高め地元雇用にも貢献した業績がそれぞれ評価された。贈賞式は26日、鹿児島市の南日本新聞会館である。



大阪牛、神戸ビーフ、近江牛。地域名を冠にいたたくブランド牛は数多いが、あえて「のざき牛」と自分の名前を銘柄化するとともに、「生産者としての責任を明確化させたい」という野崎喜久雄社長（63）の強い思いがうかがえる。農業生産法人のざきは現在、薩摩川内市とさつま町の2カ所に農場を構え、飼養頭数は約4800頭を数え

農業生産法人のざき

（薩摩川内市）



野崎喜久雄社長

年間出荷頭数の6割超が、最高級の5等級。現在、全国の高級レストランなどで扱われており、その品質の高さには定評がある。従業員の平均年齢が24歳、1

20代前後の若い従業員が肥育する「のざき牛」。近く隣地2カ所に牛舎を増設する予定だ 二さつま町平川

「牛さん」育てる若い力



全国最大級の堆肥舎。ここで作られた有機肥料は、県内農家に販売されている。

人当たり400〜500頭を受け持つことを考えると、驚異的な数字といえる。

高い肥育技術を培う秘けつは「一人ひとりが『牛さん』に愛着を持ち、じつくりと対話すること。どうすれば『牛さん』が喜ぶか、自分の頭で考えていけば自

然と良い牛づくりの方法が見つかる」。牛を「さん」付けて呼ぶのは、短い一生を人間にささげる肉用牛への敬意の表れだ。

創業20年で最大のピンチは、2006年の県北部豪雨。牛舎は完全に水没、被害額は4億5千万円に上った。「どん底」からの再起を支えたのも、やはり若い従業員たちだった。「ふん尿交じりの川に飛び込んで牛を助ける姿に力をもらった」。地域の人たちの援助もあり、水害から3カ月後、全国肉用牛枝肉共励会で最優秀賞を獲得する「快挙」を成し遂げた。

「目指すのは、若い人が夢を見られる農業。和牛文化を育てることで、その基盤を築いていきたい」。和牛牛復権の日まで、「牛さん」との二人三脚は終わらない。

●農業生産法人のざき 1992年8月設立。農場は2カ所で、96年に薩摩川内市中村町、2009年にさつま町平川に開設した。各種雄牛「平茂勝」「安福久」の発掘にも携わった。資本金2300万円。役員3人、従業員17人。12年2月期の売上高は26億2600万円。薩摩川内市御陵下町7の47。本社0996(22)2328。